

# あらためて問う「コンクリートから人へ」

徳植 桂治

最近、人生100年時代の到来と言われるようになった。高齢化に伴うネガティブ要素を除けば、人類として高寿命化は喜ばしいし、どのような時代が到来するのか好奇心をそそるものだ。比較対象として適切ではないがコンクリートの寿命も100年以上とされている。しかし、材料として社会環境変化が激しい中、100年以上の寿命を全うする例は少ない。個人的には、人間とセメント・コンクリートの寿命100年競争の決着は意味も無いが興味深い。更に言えば、この両者、お互い利害関係は無かったにも関わらず、因縁深い軋轢と言うか運命的な対立の矢面に立たされると言う不幸に出会うことになる。

## コンクリートと人の対立

2010年からセメント協会長の役目に付いたが、前年09年に国民は一度やらせてみようかと民主党政権を選択した。その政策スローガンが「コンクリートから人へ」だった。国民生活に直結する社会福祉優先の政策に、国民はこの典型的なポピュリズム政策を受け入れた。当時、様々な機会を得て、時の所管大臣や官房長官にも公開の席で、このスローガンの品の無さ、程度の悪さを訴え撤回すべきと直訴したものだ。「どっちを取るでなく、どちらも」だし「勝ち負け次元の対立概念ではない」と訴え、社名にセメント・コンクリートのつく会社に勤める多くの親の子供たちに対して肩身の狭い思いをさせるなど訴

え続けた。無論、政権基盤の根底を揺るがすような政策の撤回はノーだった。

あれから10年経った。あらためて、その政策について検証されるべきだろう。この10年は災害大国日本の矛盾・課題がクローズアップされた。東日本大震災・熊本地震・中越地震、御岳山・阿蘇・口永良部・新燃岳・白根と続く火山災害、大島・常総・広島・九州と続く水害、そしてトンネル崩壊、道路陥没、橋梁老朽化、大火災、豪雨に雪害ととめどなく続く。歴史上、この10年だけ集中したと言うことではない。災害によるダメージはそれぞれの時代環境や生活様式とも関係性がある。従って、災害の原因が公共工事縮減だと言うつもりは無いが、地球の循環する活動期に遭遇している今日の自然災害を考慮すると、国民的合意の範囲で防災・減災対策や老朽化対策をしっかりと進め、国として社会の安全・安心を構築する責任がある。コンクリートは少なからず貢献度が高いはずだ。

## 社会の劣化とポピュリズム

このように自然災害リスクは日常的になりつつある一方で、昨今人間社会の強靱性・復旧力・防災力、減災力が相対的に落ち込んできたのではないかと危惧している。高度に効率化し利便性も増してきた裏返しとしての弱さや、高齢化、分業化、人手不足という社会構造の変化が人間としての野性能力を低下させてきた。補完すべき地域コミュニティ等の繋がりの低下も顕著なのではないか。今、国民は情報の氾濫の中で科学的にも統計学的にも自然災害リスクを承知の上だが、できるだけ見たくない、考えたく



とくうえ けいじ  
太平洋セメント(株) 相談役  
元・(社)セメント協会 会長



山口県に残る明治時代の「徳利窯」

ないと言う「そっぽ向き症候群」に陥っているのが実情だ。その中で「コンクリートから人へ」と言われ、更に刹那気分陥るとすれば、それは社会への誤ったメッセージと言わざるを得ない。

社会インフラへの投資は無駄なモノで無い限り将来世代へのツケでなく資産・贈り物であり、ヒトへの社会保障的優遇は必ずしも育成投資に繋がらず、現在の長期デフレ経済社会では、むしろ生活水準維持に流用されているのが現実である。

××ファーストが時流に乗って、人々を熱狂させ、そして落胆させたのはついこの間のことだった。こうしたワンフレーズの政治的プロパガンダは分かりやすいと同時に「不都合な真実」を隠しやすい。つまり、「都合の良いフェイク」として利用されやすい。「コンクリートから人へ」はまさに悪用された。不名誉は回復させるべきだ。

## コンクリートが人を創る

今年は明治維新150年、日本の近代史において活躍した人材はどのように育ったのか。また人への投資といえる政策はどう展開されたか興味深い。我々が維新のリーダーから学ぶべきことは、およそ国づくりあるいは国民国家樹立への命を賭した主体的な情熱的なリスクテイクする心構えと行動であろう。ここでは、わが国において経験したことの無い士族

による「クーデター」と「ベンチャービジネス」が起きたことである。

明治維新時の殖産興業に基づく士族授産の気概や士族の商法の苦難に関しては、「イノベーターたちの日本史」(東洋経済新報社)を著した米倉誠一郎氏の解説が詳しい。(先生の学位論文が「政府士族授産政策と小野田セメント」であったことをこの著作から初めて知った)幕末から維新の黎明期においてセメント製造業を起こした小野田セメントの創業者である笠井順八を例に解説している。セメント製造という未知なるベンチャービジネスであったと先生は説いている。重要なことはお雇いドイツ人技師に飽き足らず、息子をドイツ留学させ世界の一流を学ばせた決断であると言う。『印象深いのは笠井家の例に限らず、企業家たちが技術や経営能力を習得のために自らの子弟や従業員を数多く海外に留学させていること』と述べている。またセメント製造の主要機器を大阪砲兵工廠に発注し、日本の工業化を切り開く先達となった。国産化の使命に燃えた技術者の育成に大きな貢献をしてきた。その後の機械・電気・化学の発展を促すわが国の近代化のためこのような創造的な対応を民間中心に挑戦していたことも注目すべきだ。「コンクリートから人へ」とはベンチャーからスタートした産業資本が矢継ぎ早に人材育成していく姿、人材の好循環再生産する姿こそ明治維新から学ぶべきだろう。

今日、人づくり、働き方、人材育成に関する議論はかまびすしい。何時の時代もこの議論は最優先課題であったに違いない。家庭や企業や地域社会などの単位のなかで、周囲の愛情で支えつつ孵化させるがごとく努力の結果である。「コンクリートから人へ」の人材投資と言う脈絡で育てる、あるいは社会が育てる、国が育てるなどは聞こえは良いが、そんなに簡単なことではない。賢者たちの言葉に従えば、それは出会いのたった一言、たった一人、たった一時期、などのごとく人生を決める触れ合いによるものだ。子供手当てのお陰で人生が開かれたと言う美談は生まれえない。

## 国づくりと人づくり

日本でのセメント・コンクリート産業が苦境に陥っていたとき、2010年4月、ベトナムのギソンセメントの第二生産ライン竣工式に出席した。帰国後、社内のトップメッセージメールにこのような発信をした。『何かと暗いニュースが多い中、増設完成は嬉しい。単一工場で435万tはベトナム最大の規模。ベトナムは日本の内需を超える4,500万tに成長した。国の発展・成長を実感できるまさに「コンクリートは人のため」に役立っている。2年目から利益を出しているが、毎年利益の一部を奨学金としてベトナムの大学生を支援し続けていること。また、ギソン工場に隣接して幼稚園を運営し子供の成長を支援している話を紹介した。式に同席した日本の銀行の役員が、これこそ、コンクリートから人への本当の姿ですねと呟いた。セメント・コンクリートこそ人づくりに役立っていることを誇りに思う。』というメッセージであった。これを読んだ当社の中国人スタッフからメールが届いた。『社長の言う「人づくりに役立っていることを誇りに思う」に対して共感・共鳴する。このような誇りと使命感を持って経営することは日中合弁会社の大きな励みだ。中国建材連合の会長、セメント協会の会長が合弁社工場を視察して、中国業界の先頭を走っている。企業文化の構築と生産経営がうまく融合している。との褒め言葉を頂いた』と報告してくれた。企業の社会的存在価値をきちんと評価する見方は世界共通なのだと実感している。

## 真実への回帰

今でもコンクリートから人へのスローガンを訴え続け、選挙ポスターに個人名より大きく「人への投資」を訴える方がいます。子供は国の宝だと称して、国家が育てるのだと。民主主義制度での選挙だから訴求力のあるフレーズは必要なのだろうが、いい加減に「コンクリートから」は封印して頂きたい。これ



ベトナム・ギソンセメントの式典に立つ筆者

まで見てきたようにコンクリートが人を創り、育ててきたのだから。これからも役割責任は果てしなく続く。

私の活動の場でもある経済同友会の小林喜光代表幹事が「AI時代の教育論」という小論の中で、『AI時代の教育は人間らしい経験を積むこと、つまり挫折と絶望だ。AIは絶望できない。そして競争社会という現実に立ち向かい、大人が必死の姿を見せなければ子供は育たない』と主張しています。即ち、その位強靱な精神性が教育には求められると言うことで、単なる「人への投資」という甘い言葉がいかにも薄っぺらな人材育成に感じられる。

あの当時の「コンクリートから人へ」政策は公共事業から社会保障の充実へ財源を移すべきというもので、人への費用は投資で個人消費の活発ひいては経済成長にも繋がるとした。同じ税金を使うなら経済効果は高いと主張した。しかし、乗数効果を含めてこれら理屈は怪しいし破綻している。私の主張は「コンクリートは人を創る」し、創ってきた歴史がある。それが事実だ。人材を育成し、さらに人材の循環・再生産を行い、人々の生活環境を保ち、安全安心を与え、高齢化社会を下支えする、それらに貢献するのがコンクリートなのだ。あらためて問う、「コンクリートから人へ」の真実は「コンクリートが人を創り、育てる」なのだ。また、歴史はそれを証明してくれる。  
[隔月で掲載します]